人間と人魚

人魚と王子様が出会ってからたくさんの時間がすぎました。
人魚はまた、足がほしいと思うようになりました。

人魚は真夜中に魔女を呼び出しました。魔女は月が真上に来た〝ぴったり真夜中〟に、砂浜にやって来ました。
人魚は意を決して、魔女に頼みました。
「あの魔法をかけてちょうだい」
魔女はあの時と同じ、無感情な顔を人魚に向けました。
「足がほしくなったのか」

人魚は寂しそうにうなずきました。
足を手に入れる代わりに、大切な声を失ってしまうのです。だから人魚は、ここ何日か、ずっとうたっていました。誰も不思議に思いませんでしたが、王子様だけが不安そうな顔をして「どうした」と聞いてきました。でも人魚は「なんでもないわ」と首を振るだけにしました。
声を失ったら、王子様は悲しむでしょうか。でもきっと、人魚が人間になったら喜んでくれるはずです。だから、耐えきれないほどの痛みにも、耐えてみせるつもりでした。
魔女に話して覚悟が決まったのか、人魚は凛と背筋を伸ばして、魔女を見上げました。魔女はまだ、雪女のような冷たい無表情を向けていましたが、人魚は気にしませんでした。
「私を、人間にしてちょうだい」

そこでやっと魔女の顔が変わりました。はっと鼻で笑って人魚を見下ろしました。
「それはできないよ、人魚姫様」
「……前は、できると、言ったわよね」
人魚は眉根を寄せました。魔女が膝を折って、ずいと人魚に顔を近付けました。
「足を与えることはできるが、人間にすることはできない」
人魚は混乱しました。頭のすみで小さく、警鐘が鳴りだします。
「〝姿を変える魔法〟とは、その意味のとおり、姿を変えてくれる魔法だ。仮に、犬を猫の姿に変えたとしよう。犬は完璧に猫の形になる。だがその本質は犬のままだ」
警鐘が大きくなります。

「女を男にしたり、蒼い目を紅くしたり、肌の色を変えたり……。すべて可能だ。だが、そのものが本来持っている〝核〟となる部分は変えられない」
警鐘が、どんどん大きくなります。
「お前に足を与えることはできる。だがそれは、〝人間の足を持った人魚〟ということにしかならない」
もう他のことが考えられなくなるくらい、人魚の頭の中では警鐘が鳴り響いていました。
人魚は心の中で、いちばん言ってほしくないことを言われないように願いました。
でもきっと無理でしょう。魔女は嘘がつけないのですから。
「人魚の姫よ。お前の望みは、王子と一緒に生きることだろう」
人魚の体が震えました。

「同じ時を生きることだろう」
そう、それが、いちばんの望み。
警鐘が響きます。どうせなら魔女の声が聞こえなくなるくらい、大きくなればいいのに。
「だがそれは無理だ」
なぜ魔女はこんなひどいことを、平然と言えるのでしょう。
でも人魚にはわかっていました。長い付き合いです。人魚は今、魔女がどんな気持ちなのか、よくわかっていました。
「お前は人間と同じ時を歩けない」
ふっ……と、警鐘が止みました。より鮮明に、魔女の言葉が届きます。
「お前は、人魚の時を生きるんだ」

時間

花祭りで結ばれた男女を、何組も見ました。
アーリュが言葉を話すようになっただけでも驚いたのに、いつの間にか立派な青年になりました。
結婚式のときにいた大臣はもういません。
流行りの歌はずいぶん変わりました。
街の姿も少しずつ様変わりしていきました。

王子様は王様になりました。
戴冠式があるので、人魚は久しぶりにお城へ行くことになりました。結婚式

と同じように、きれいに着飾りました。
あまりに美しい姿なので、着替えさせてくれた召使いは、何度もため息をつきました。
着替え終わったころ、王子様が部屋に入ってきました。王子様も、青と黒の礼服に着替えていました。王子様は人魚を見ると、愛おしそうに目を細めました。
「きれいだよ」
何度も言われた言葉なのに、やっぱりくすぐったく思いました。人魚は頬を染めてはにかみました。
召使いは「最後の仕上げをします」と言って、人魚の前に鏡を持ってきました。人魚の後ろに、ほほ笑む王子様が映っていました。
そして人魚は愕然としたのです。

――いいえ。なんとなく、わかっていたことでした。ただ、見ないように、考えないようにしてきたのです。
鏡に映った王子様は、昔の王様にそっくりでした。もう壮年と言えるような年齢ですから当たり前です。
皺の増えた顔や、白髪混じりになった髪。でも、真っ黒な目は、出会ったときのままで、やさしい色を湛(たた)えていました。
でも人魚は、王子様の〝老い〟に驚いたわけではありませんでした。驚いたのは、自分の姿でした。
出会ったときから何も変わらない、自分の姿に。
瑞々しい肌、豊かで艶やかな髪。美しいその姿。若々しく美しいだけならどんなによかったでしょう。

でもそうではありません。王子様にははっきりとある〝時間の流れ〟が、人魚にはまったくありませんでした。

驚いた顔がほんの一瞬、鏡に映りましたが、召使いは気づいていないようでした。

鏡の王子様と目が合いました。王子様もほんの一瞬、悲しい笑顔をしました。人魚と王子様は、ただ黙ってほほ笑みあいました。

そして二人は、目を閉じたのです。

永遠

月がほんの少しかたむいていました。人魚は、涙のにじむ緑の目を魔女に向けていました。魔女も緑の目をしていましたが、相変わらずなんの感情も示していませんでした。

ただ言葉だけは、穏やかでした。

「おまえはきっと、長い長い時を生きるのだろう」

——言わないでちょうだい。

人魚は心の中で叫びました。でも、顔も体も動こうとはしませんでした。

「それはたぶん」

——お願いよ。

「永遠だ」
涙があふれました。
心の中で、たくさんの人魚が叫びました。

人間になりたい。
草の中を歩きたい。
お城に住みたい。
軽やかに踊りたい。
声を失ってしまったってかまわない
うたえなくなったっていい。
王子様と一緒に生きたい。
そして、同じように、終わりを迎えたい。

終わりがほしい。

叫びの数だけ、涙が落ちていきました。
人魚の時間。
魔女の時間。
人間の時間。
ばらばらな残り時間。でも、本当の意味で時間が残されているのは、魔女と人間だけ。人魚に残されているのは、永遠の時間なのですから。

いつか彼を失ってしまう。
魔女もアーリュも、みんなみんな、人魚を置いて、遠くへ旅立ってしまう。
ひとりぼっちの人魚を残して。

人魚はうつむいてかぶりをふりました。

〝ちがう〞
〝いや〞
〝どうして〞
なにもかも、すべて、否定しているように見えました。

泣き続ける人魚を見つめて、魔女は考えていました。もし人魚が人間だったら、どうなっていただろう、と。答えは簡単です。
〝なにも変わらない〞
人魚が人間でも、王子様と出会って、恋に落ちて結婚して、歌が上手で、みんなから愛されたでしょう。気むずかしい魔女とだって、簡単に友達になれたはずです。
どうにか彼女を人間にできないか、魔女も手を尽くしました。

自分の持っている書物はもちろん、王室の倉庫、旅人の話、遠い国のうわさ。なにかないかと、手当たり次第探し回りました。でも、そんな都合のいい魔法なんて、どこにもありませんでした。
たいした願いではないのです。
老いて、死んでいきたいという、人間にとってはあたりまえなことを望んでいるのです。それなのに、どうして叶えられないのでしょう。
魔女だって姿は変わりません。でも、終わりの日は絶対に来るのです。望んでいるわけでもないのに。
魔女は人魚を残して、自分だけ死んでいってしまうことを、悔しく思いました。

人魚は、声も立てずに、泣き続けました。心の中は音もなく静かで、荒(すさ)んで

いるわけでもないのに、涙は止まりませんでした。
人魚は、王子様がいなくなってしまったあとのことを、考えてみました。
でも、想像できませんでした。王子様と出会う前、どうやって過ごしてきたのか、思い出せないのです。
考えているうちに、人魚はもうひとつのことに、気づきました。
自分がどうして生まれたのか。
誰から、なにから生まれたのか。
いったいいつ生まれたのか。
人魚はそのすべてを覚えていませんでした。
それに気づいた瞬間、自分が〝終わらない命〟なのだと、なぜか納得できました。

心に
闇が

ひとしずく

波紋が
波紋が

広がって
広がりながら
広がって

闇も

闇が
心が

落ちる

狂うとはこれか。と、人魚は静かに感じました。怖いとも、いけないとも思いませんでした。

目の前が真っ暗になって、狂気が目覚めそうになった瞬間、両肩をものすごい力で、つかまれました。その勢いで、仰向けに押し倒されました。見ると、魔女がものすごい形相でにらんでいます。

「おまえ今、なにを考えた」

人魚には魔女がなにを言っているのか、よくわかりませんでした。魔女はそのまま人魚の腹に乗り、人魚の頬をはたきました。

びりっとした痛みのあと、頬がかっと熱くなって、じんじんと痛みました。思いっきりやったようです。

そして魔女は、人魚の首にそっと触れたあと、両手で強く締めました。

人魚は、驚きました。空気がどんどん足りなくなっていきます。

人魚は魔女の手首をつかみました。「やめて」と言おうとしましたが、うまく声に出ませんでした。

「苦しいか？」

魔女が人魚に問いかけます。もちろん人魚に答えられるはずありませんが、魔女は続けます。

「苦しいか？　息を吸いたいか？」

魔女の手が、さらに締まります。

「それは、お前が、生きているからじゃないか！」

人魚ははっとしました。

「死なないかもしれない。でも今、確かに、生きているじゃないか」

そう叫ぶ魔女は、今にも泣きそうでした。

「終わってしまうんだよ？　だから、だから……」

魔女の手が、人魚の首から離れました。
「せめて私たちと一緒に、生きてくれ」
魔女が大粒の涙を流しました。魔女の泣き顔なんて、初めて見ました。
人魚は涙の流れるその頬にふれました。
「終わってしまうのよね」
「そうだ。少なくとも私たちは……、確実に」
人魚は体を起こして、両方の手で、魔女の頬を包みこみました。
「ごめんなさい。……そうね、泣いているひまなんてないのね」
「それはちがう」
魔女は自分の頬から、人魚の手をはがして、二人の間でその手をにぎりました。泣きやんではいましたが、まだ無表情には戻っていませんでした。
「どうして？　笑っていなくちゃ。もったいないでしょう？」

魔女はやわらかく首を横に振りました。
「明日、家族でちゃんと話してごらん」
そう言ったあと、魔女は結婚式のとき作ってくれた〝しあわせになれるおまじない〟を唱えて、森に帰っていきました。

家族

人魚は次の日、王子様とアーリュに、時間の話をしました。人魚と人間の時間の話を。

王子様とアーリュは、ぽつぽつと語る人魚の言葉を、黙って聞いていました。昨日の晩にあったこともすべて話したあと、人魚は二人に頭を下げました。

「私が人間だったら、こんな悲しいことにはならなかったのかしら」

「それはちがうよ、母さん」

顔を上げると、アーリュが真摯（しんし）な目で見つめていました。

「だって、母さんが人間だったら、私はここにいない」

人魚は少し目を見開きました。たしかに、あの状況から助けることができたのは、人魚だけでしょう。

「それに、母さんが人間だったら、きっと父さんなんかより、もっといい男を見つけてる」

あまりの物言いに、王子様が苦笑しました。

「そうかもしれないな。私に出会うより前に、もっといい男に見初（みそ）められていただろう」

父と息子は笑いあいました。人魚は、そんな二人を、驚いた顔で見つめていました。

「母さん。私は、あなたが人魚でよかったと、ほんとうにそう思う」

その言葉はとても澄んでいて、うそや同情なんて、みじんも感じませんでした。ほんとうに心から、そう思ってくれているのでしょう。

人魚は、笑ったその顔が、出会ったころの王子様とそっくりなことに気づきました。

そのとなりにいた、壮年になった王子様が、人魚の手を包みこむようににぎりました。

「私も気づいていたよ。私たちのあまりにちがう、時間のことを」

王子様は、人魚の目ではなく、にぎった手をじっと見ていました。

「私はどんどん老いていく。おまえはずっと美しいままだ。でも、必死に気づかないふりをした。……恐ろしかったからね」

王子様も人魚と同じでした。同じように、苦しんでいたのです。置いていくものも、置いていかれるものも、別れは同じです。

王子様は、大きく、息を吐きました。

「むごいな……、ほんとうにむごい。私たちはただ、おまえを愛しているだけ

なのに」

最後の方はもう、涙声になっていました。アーリュも、静かに涙を流していました。

人魚が二人を抱きしめようとしたとき、王子様がその大きな腕で、人魚とアーリュを包みこみました。家族全員で寄りそうなんて、いったいいつぶりでしょう。

人魚は王子様とアーリュの息の音を聞いて、二人のことを、とても愛おしく思いました。今までだってそうでしたが、それ以上に強く、強く。

泣く二人を見て、人魚は「ああ」と、一人で納得しました。

人魚は置いていかれるのだと思っていました。みんな、自分を置いて、いなくなってしまうのだ、と。

でもそれは、そうではないのです。
人魚が愛する人たちにとっては、人魚が彼らを置いていってしまうのです。
全員を置いて、長く、永く、生き続けてしまうのです。
どちらがどちらではなく、別れは両方にとって、苦しいもの。

いつかやってくる別れは、とてもむごく、ひどく痛むでしょう。
でも、人魚は、今。そう、たった今。しあわせでした。
すぐそばにいる、王子様とアーリュを、愛おしくてしょうがないと思いました。愛しさで、心がいっぱいでした。
そして、今すぐにでも、愛する人すべてを抱きしめたいと思いました。
そう思ったら、刹那の一瞬さえも惜しい気がしてきました。

でもきっと、焦ってはいけないのです。限りある時間を笑っていなければと、思う必要はないのです。
人魚は、王子様とアーリュに腕を回しました。温かさが体に流れこんできました。たったそれだけなのに、涙があふれました。昨日とはちがう涙が、止めどなく流れ落ちました。

その人を思って泣いて。その人との別れを想像して泣いて。
悲しんで、嘆いて、泣くことは、決して無駄なんかではありません。

だって今、こうして泣いているのに、心は愛しさでいっぱいなのですから。

初夏の日

時は緩やかに、でも、止まることなく、流れました。
いくつもの春がすぎ、いくつもの夏が過ぎ、いくつもの秋が過ぎ、いくつもの冬が過ぎていきました。

王子様は老いました。
顔には深い皺が刻まれ、髪は真っ白になりました。歩くときも杖が必要でした。でも、人魚にとって、王子様は王子様でした。
アーリュが王様になったので、王子様はありあまる時間のすべてを、人魚とともに過ごしました。

花祭りが過ぎてしばらくしたころ。風は青々とした空気を運び、夏の訪れを告げていました。
王子様はいつものように、人魚の横に座り、人魚の歌に耳をかたむけていました。人魚がふと、王子様に問いかけました。
「どうして、愛してる以上の言葉がないのかしら」
他愛もない質問に、王子様は髭をたくえた口で笑いました。
「何度でも言えるようにだろう」
「じゃあ、私は〝愛してる以上の言葉〟以上に、何度もあなたに愛してると伝えるわ」
そう言って、人魚はまたうたいだしました。王子様の好きな異国の歌でした。

王子様は目を閉じて、愛する人の歌に、耳をかたむけました。
人魚はうたいながら、自分の結婚式のことを思い出していました。
白い服。白い花の髪飾り。花の雨を浴びながら通った街。儀礼堂の空。誓いの言葉。誓いの口づけ。
そのあと、お城の露台から、街の人に手を振ったのです。そこでまた、口づけをしました。
夜には盛大な宴（うたげ）が催されて、花火も上がりました。魔女の〝しあわせになれるおなじない〟も、そのとき聞きました。
人魚はしあわせな気持ちで、くり返しくり返しうたいました。
王子様の息が聞こえなくなったあとも、人魚はうたい続けました。

物語の終わり

王子様の葬儀の次の日の朝、あたりがやっと白みだしてきたころ、魔女は海へ行きました。
近づいてきた足音に、人魚が振り返ると、髪を切った魔女がいました。腰まであった髪を、肩口で切りそろえていて、より若く見えました。
「驚いたわ。髪、切ったのね」
「長くなったからね」
その答えが人魚はおかしくて笑いました。出会ってからずっと長いままだったのですから。
「行くのか」

魔女の問いかけに、人魚は笑うのをやめました。
「ええ」
悲しさと、寂しさと、悔しさと、そしてあたたかい気持ちに満ちた笑顔で、人魚は答えました。魔女は「そうか」とだけ答えました。

水平線の先が、赤く燃えてきました。
人魚は何も言わず、魔女を見て、また笑いました。魔女も笑いました。意地悪な笑顔でも、皮肉な笑顔でも、あざ笑うのでもなく。素直に笑いました。
人魚は満ちてきた海に入り、一気に潜って泳ぎました。
そして遠くまで行ってから、顔を出して、自分がいた砂浜を見ました。魔女はまだ、そこに立っていました。
人魚も魔女も、お互いの姿を認めただけで、手を振ったり、呼びかけたりすることはしませんでした。
一瞬だけ目を合わせたあと、人魚はまた海に潜っていきました。
魔女はずっとそこに立っていました。潮がどんどん満ちてきて、魔女の服と靴を濡らしましたが、気にしませんでした。
魔女は別れの言葉を告げることなく、静かに森に帰っていきました。

あとがき

時間と構成上カットしてしまったストーリーがあるのが少し心残りです。人魚の名前のこととか、踊り子の話とか、息子の葛藤とか……。

でも「実はこうなんです」っていうのを、あとがきで書くのも未練がましいので、黙っておきます。

一つ伝えることがあるとすれば、人魚にも、王子様にも、魔女にも名前があるということです。出さなかったのは、絵本のような雰囲気を持たせたかったから。彼女たちをぼやっとした存在にしたかった。……なんとなく。

今回、印刷にいたるまでの工程を、すべて自分でやりました。

原稿を書き、組み上げ（本のデータを作り）、赤字入れ、修正……。そんな作家、ほかにいるんだろうか……。

拙い作品なのは重々承知しています。

読んでいただいた方から、感想や批評をいただけるのを楽しみにしています。

最後に会社の同僚に土下座級の感謝を。

私が仕事中こっそり作業しているのを、快く許してくれて、本当にありがとうございました。

その分、これから仕事頑張ります。

青井アカネ

人魚姫と王子様

2009年８月24日　初版第１刷

著者　青井アカネ

mail：gblueg@mail.goo.ne.jp
URL：http://cyanandmagenta.web.fc2.com/